




# 1 作物

項目	作業内容
<p>(1) 麦の栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)            麦の栽培管理            水田の土づくり</p> <p>ア 湿害対策            11月25日高            松地方气象台            発表の四国地方            1か月予報によ            ると、12月は気            温が高く、降水            量は多との予報            であり、麦栽培            では今後も徹底            した排水対策が            必要になる。</p> <p>写真1 湿害の発生</p> <p>播種後に圃場周辺や圃場内の排水溝を設置していない圃場は、早急に2～3m毎に排水溝を設け、排水対策が不十分な圃場では再度排水溝を設置し、雨水を圃場外に排出できるよう必ず明きよで導く。</p> <p>イ 雑草防除            今年は播種前後に雨が多く、播種直後の土壌処理除草剤の効果が低下しており、12月も降水量が多いとの予報から、土壌処理剤だけでは十分な雑草防除ができないことが懸念される。写真2のように雑草が発生している圃場では、草種に応じて効果のある茎葉処理剤を散布する。また、排水不良な圃場では特に雑草が繁茂しやすいため、明きよの整備など排水対策を徹底することも雑草防除には重要である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>写真2 麦栽培圃場のスズメノテッポウ(左)と広葉雑草(右)</p>

項 目	作 業 内 容
(2) 水田の土作り	<p>ウ 中間追肥</p> <p>生育中期の生育促進による有効茎の確保と、湿害や黄化症の発生した麦の生育回復を目的に窒素の中間追肥を施用する。ドリル播栽培では、硫安や尿素等を10 当たり窒素成分でマンネンボシは2～2.5 kg、ヒノデハダカは2 kg を12月～1月下旬までに施す。</p> <p>特に今年の麦は、播種前後のまとまった雨で湿害の発生している圃場があり、その回復のために窒素追肥が有効である。</p> <p>また、マンネンボシは穂数がやや少ない特性があるのでその確保のために、ヒノデハダカは生育中の窒素欠乏を予防するために中間追肥を必ず追肥する。しかし、過剰施用や2月下旬以降の施用は倒伏の危険性を増大させるので葉色や生育状況を見ながら適量を施用する。</p> <p>気象災害や病害虫に強い稲作のために、土壌改良資材や堆肥施用により、冬の間には土づくりを行う。</p> <p>ア ケイ酸質資材の施用</p> <p>ケイ酸は水稻には必須の養分であり、水稻の登熟向上といもち病等の耐病性向上や倒伏の軽減、品質食味の向上及び水田土壌の酸度矯正（適正pH5.5～6.5）のためにケイ酸質資材を10a当たり100～150kg施用する。</p> <p>近年、登熟期の高温や日照不足による登熟不良で、乳白・心白粒及び充実不良粒が発生して外観品質が低下しているが、その軽減にケイ酸質資材が有効であるため、積極的な施用が望まれる。</p> <p>イ 有機質の補給</p> <p>腐植や地力窒素等の増加を目的に堆肥等の有機質の補給を行い、必ずロータリ耕等ですき込む。生わらをすき込む場合は、冬の間には腐熟分解が不十分だと次年度の水稻が根腐れを起こし易いので、石灰窒素（10a当たり20～40kg）等の窒素を補給してすき込み、分解を促進する。</p> <p>なお、堆肥や石灰窒素を施用した場合は、資材や土壌の条件に応じて次年の水稻栽培の基肥を10～50%程度減らす。</p> <p>ウ 耕起</p> <p>冬期に作物を栽培しない水田では、駆動ロータリやプラウで反転耕を行うと、作土層の拡大や透水性の改善になり、さ</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>らに土壌が乾燥するため有機物の分解に伴う各種養分の供給が期待される（乾土効果）。しかし、単に耕起するだけでは地力が消耗するので有機物の補給を同時に行う。</p> <p>また、プラウによる反転耕は、水田雑草の種子を土壌の中に埋め込み、土壌の乾燥を促しクログワイ、オモダカ等の難防除雑草の塊茎を冬の乾いた寒風にさらして死滅させ、翌年の雑草の出芽を少なくする効果がある。</p> <p>特に、クログワイはその生態上、除草剤だけでは防除が極めて困難であるが、冬の圃場の乾田化を組み合わせることで大幅に発生が抑えられるので、排水対策と耕起を積極的に実施する。</p>  <p>写真3 湿田等に多い難防除雑草クログワイ</p> <p>さらに近年、中予地方を中心に田植え直後の水稻の食害が拡大しているスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の耕種的防除法として、水稻収穫後に浅く、ピッチを小さく（走行は遅く、耕うん軸 PTO 回転は速くして）耕耘することが密度低減に効果が高い。特に食害の大きい 2 cm 以上の大きな個体ではこの耕耘法によって 65～95%の越冬貝を死滅させる効果が確認されており、被害の大きい圃場では積極的に取り組む。</p>

（作成 農林水産研究所）